●制作

犬目線で歩く
—住宅地における人・動物共演の空間づくり—

福永ヒカル　園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム（主指導教員：章　俊華）
FUKUNAGA　Hikaru

１．研究の背景と目的

現代の日本では少子高齢化が進み、子どもの数より家庭で飼われている動物の数の方が既に多いことが知られている。[1)2)]また、人間と動物の関係は時代と共に変化し、現代では親が子供にしてあげたいと思うほぼすべてのサービスがペット市場にも潜在的に存在しており、隙間市場とみなされている。[3)]加えて、少子化が進行していくことを考慮すると、子どもと動物の数の差は将来的に更に拡大していくだろう。一方、このように人の生活と深く関わるペット動物たちを主役とし、彼らが快適に過ごせるように配慮された空間が街に少ないことについて課題として取り上げられることは極めて少ない。海外や畜産業等ではアニマルウェルフェアの考え方も広まっていることと比べると、現代日本に残された大きな課題だと考える。

そこで本研究では、散歩の際に人間と共に外を歩くことが多い犬に注目し、都市空間の利用主体を動物として見直した視点からの空間づくりを提案する。街は、私たち人間を基準に設計されている。そのため、目線を低くし、犬たちの基準で考えてみると想像以上に使いづらい部分が多いはずであり、改善の余地は多いと考えた。

2. 対象地

東京都中野区桃園川緑道を対象地として選定した。

中野区はかつて生類憐みの令が出された際に御囲という動物たちを保護する、現代のシェルターのような施設が置かれていた地域であり、動物、特に犬とは歴史的な関わりがある。[4)]また、桃園川が暗渠化された桃園川緑道は杉並区から中野区にかけて３キロ程続いており、生活動線であると同時に散歩道となっている。同緑道の東の終点である神田川への合流地点を対象地とすることで、川沿いのランニングコースと緑道、桃園川と神田川という２種類の交点に、動物と人とが交流する新しいコミュニティの空間がつくられると考えた。

３．調査

犬の生活様式を反映した都市のオープンスペースの設計手法を、以下のように仮説的に想定することにした。まず、ヤン・ゲールの「公共空間の１２の質の評価基準」をもとに人間の基準を犬の基準に置き換えて考えた。[5)]また、それについて犬はどのように利用するのかを考えるために、犬の目線で街中にどのような空間があるのか、それについて犬はどのように利用するかを考えるために、犬の目線で観察した現地の桃園川緑道主要部のデザインサーベイを行った。[6)]

「公共空間の１２の質の評価基準」は、人間の感覚や要求、人々を快適にしたり公共空間に留まらせたりする要因についての基礎的な知識であり、保護、快適性、喜びという３つの主要なテーマによって組み立てられている。これらを主に体の大きさの違い、感覚の違い、行動の違いという３つの違いから見て人間の基準から犬の基準に置き換えた。その結果、少しの段差が犬にとっては大きな障害物となり、素足で地面との距離も近く嗅覚や聴覚も優れているため、人間にとっては不快でなくても犬にとっては不快な状況が多くあるとわかった。また、匂いや他の犬から情報を仕入れたり、散歩中に排泄したり、縄張り意識があったりと散歩に歩く以外の目的が複数あるという違いを見出すことができた。

12の質の評価基準	人間	犬
交通と事故からの保護「安全」	歩行者の保護、**交通不安**の除去	犬も安全に歩ける、 自転車や歩行者の傘からの危険
犯罪と暴力からの保護「治安」	活気ある公共領域、街路に注がれるまなざし、 昼夜を通して展開する機能、**照明**	足元(犬の目線)に特に注目した明るさ
不快な感覚体験からの保護	風、雨、雪、寒さ、汚染、ほこり、騒音、照り返し	人間よりも鋭い感覚 ＋有害植物、ダニ
歩く機会	歩くためのスペース、**障害物**の除去、良好な路面、万人への開放、興味深いファサード	障害物(段差、ごみ) 路面の熱や滑り
たたずみ滞留する機会	エッジ効果(たたずみ滞留するための魅力的なゾーン、たたずむための拠り所)	たたずむ＝落ち着き →隅、狭い場所、壁際など
座る機会	着席のためのゾーン、利点(眺望、日照、人々の存在)の活用、休憩	快適な地面(温度、湿り気、草の伸び具合など)
眺める機会	適度な**観察距離**、遮断されない**視線**、興味深い眺め、照明(夜間)	高さや障害物による距離感(犬×犬、犬×人)、視線の高さの違い
会話の機会	低い騒音レベル、会話をつくりだすストリートファニチャー	会話＝遊び、情報収集
遊びと運動の機会	創造性・身体活動・運動・遊びの促進、昼も夜も、夏も冬も	犬同士がじゃれ合えるスペース
スケール	**人間的スケール**で設計された建物と空間	犬的スケール(体の大きさ、感覚)

４．提案

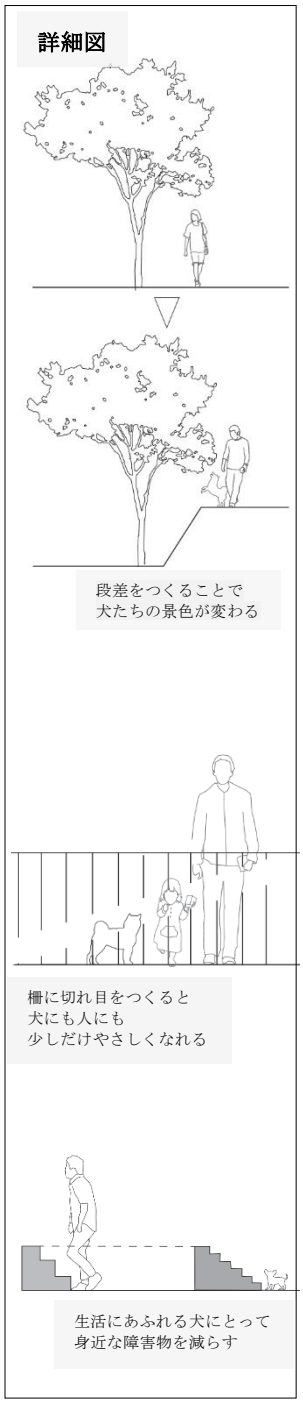
暗渠になっている桃園川の水流を一部視覚化し、親水スペースをつくることで２つの川とそれに沿う２つの道に繋がりを持たせるとともに中野の歴史を感じられるようにした。

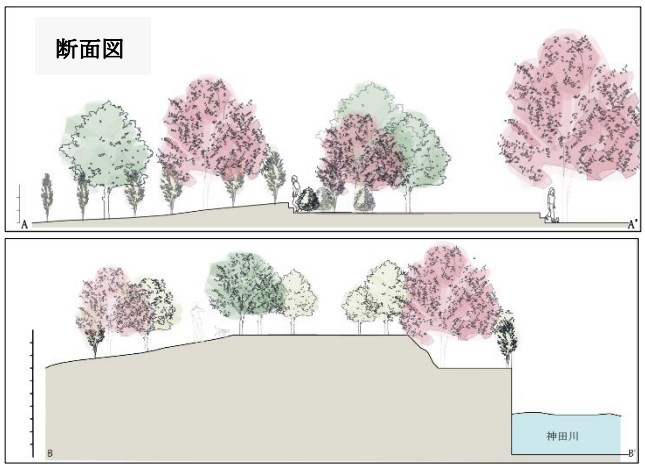
犬の目線と桃園川水流の復活を組み合わせることで、健康、防災、交流、歴史という４つの観点から地域に影響を与えられる、人・動物共演の空間づくりが可能になると考えられる。人間だけでなく、犬にとっても使いやすく快適に過ごすことができる空間によって他の動物や自分以外の人間のことを考えるきっかけとなる。また、動物と人が共演できる空間により、犬と犬、人と人、犬と人の距離が縮まり、街に多方面からプラスの影響を与える。今回の対象地を起点として地域全体に動物と共に過ごす意識が広がることを期待している。

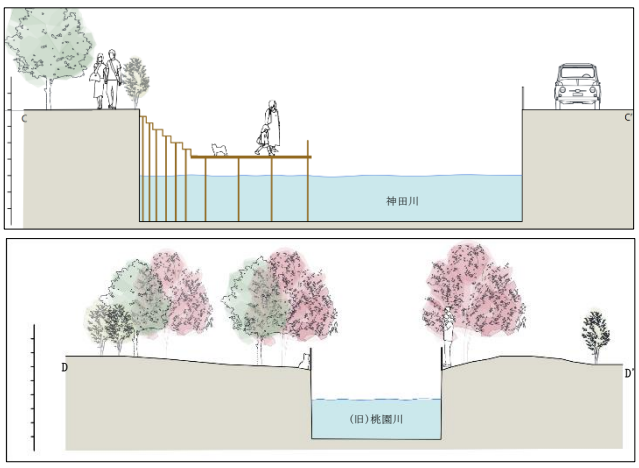
参考文献

1)一般社団法人日本ペットフード協会　２０２２年（令和４年）全国犬猫飼育実態調査結果
2)総務省　２０２２年（令和４年）人口統計　3)経済産業省　ペット産業の動向　4)中野区HP　なかの物語　5) パブリックライフ学入門（ヤン・ゲール、ビアギッテ・スヴァ/鹿島出版会）　6)都市デザイン 101 のアイデア（マシュー・フレデリック、ヴィカス・メータ/フィルムアート社）

平面図
N
0 1 2 3 4 5 10
神田川
+3200mm
+200mm
桃園川が一部姿を現す
（旧）桃園川
視点スペース
段差による視界の変化と距離感の創出
段差による犬たちの視界の変化
いつもと違う景色に
植栽による衝突回避
（犬嫌いの人や人嫌いの犬など）
犬の体の大きさに合わせた階段
足元中心に照明を配置
犬の視界を明るく
座面が広く犬も座れるイス
非対面式の形で座りやすく落ち着く場所に
抜け道風の配置や植栽で
木々に囲まれる感覚に
距離感をつくりだす段差
ふたつの空間が誘い込み合う
ごみが目立ち熱を溜めにくい
明るい色の路面
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'


詳細図
段差をつくることで
犬たちの景色が変わる
柵に切れ目をつくると
犬にも人にも
少しだけやさしくなれる
生活にあふれる犬にとって
身近な障害物を減らす


断面図
A
A'
B
B'
神田川


C
C'
D
D'
神田川
（旧）桃園川